

日中「松竹梅」の比較研究

——梅のイメージを中心に——

冬の寒さに耐え緑を保つ松と竹、厳寒の中で花を咲かせ
る梅は、取り合わせとして「歳寒三友」と称されている。
この取り合わせは中国から起こったものであり、古代中国
では絵画をはじめ、彫刻、織物、染色、ないし詩文などの
諸分野に活躍し、「清廉・潔白・節操」などといった、文
人の理想を表現したものと認識されている。日本に伝わっ
てきて以来、「松竹梅」として知られ、めでたいものとし
るしとして、お正月や祝い事の飾りなどに用いられるのが
一般的である。

一 松竹梅の由来

1 中国での起源——題画詩

「松竹梅」の取り合わせの成立時間について、中国の学

界ではいくつかの説が分かれており、断言するのは難しい
とされている。張仲謀氏が主張する北宋末・南宋初説と、
謝先模氏による唐代説と、程傑氏が提案する南宋説などが
ある^①。ただし、どの説にしても、この「三友」の取り合わ
せが最初に現れたのが、絵画だったという点は一致してい
る。

現存資料によると、松竹梅がはじめて併称されるのは、
唐代の書道家李邕の「題画」詩に「醉裏呼童展畫、笑題松
竹・梅花」とされる^②。また、北宋徽宗朝所蔵の『宣和画譜』
の解説の中にも、「故花之於牡丹芍薬、禽之於鸞鳳孔雀、
必使富貴。而松竹梅菊、鷗鷺雁鶩、必見於幽間」という文
句が見える^③。さらに、蘇軾の題画詩に「梅寒而秀、竹瘦而
寿、石丑而文、是為三益之友」とあり、後世の人は石を松
に替え、「三友」を松竹梅と固定させたという説もある。

韓 雯

さらに、「歳寒三友」という呼称については、程傑氏の論考によれば、北宋と南宋の間の周之翰の「藝梅賦」に「歳寒三友居其中」の句が見え、これは現存文獻の中で「歳寒三友」の言葉の初出とされる。⁽⁴⁾「歳寒」は『論語』子罕編の「歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るるを知る」から取ったと思われ、「三友」も『論語』の「益者三友」によって名づけられたと思われる。

南宋の詩人樓钥（1137～1213）の「題徐聖可知県所藏揚補之二画其二」に「歳寒只見此三人」の句が見られ、同時代の画家揚補之（1097～1169）が「三友」の図を描いたことがわかる。揚補之自身も、梅を詠む詞の中に「雪月光中、煙溪影裏、松竹梢頭」（『柳梢青』）という句を残し、梅を松、竹と組み合わせる例が見られる。また、詩人張元幹（1091～1170?）が「歳寒三友図」という詩に、「蒼官森古鬣、此君挺剛節。中有調羹姿、獨立傲霜雪」と、「三友」絵の構図を記録し、同時代の詩人王炎（1137～1218）も「題徐參議画軸三首・歳寒三友」という題画詩を残した。これらの例は、南宋に「歳寒三友」がすでに絵画に現れることを裏付けている。

東洋美術の研究者鈴木敬氏は、美術の面から次のように解説している。

「三友のうち、墨松は中唐ごろの畢宏、韋偃らによっ

て画かれはじめ、墨竹はややおくれて晚唐より五代の間に成立したものと想像される。（中略）墨梅の起りも明らかでないが、北宋の華光仲仁が、最初の様式を完成し、南宋の楊（ママ）補之になって、およそ元代以降の墨梅画形式が確立されたものと思われる。（中略）しだいに三友は松竹梅という内容に固定されていった。⁽⁵⁾

つまり、松竹梅それぞれが絵画に描かれる歴史は長い、取り合わせとして登場するのは南宋から始まったと思われる。「歳寒三友」は最初に画題として描かれたものであり、やがて陶器や建築の文様などに応用されるようになり、さらに文人たちの題画詩によって絵画から独立され、文学の世界に入ったのである。

風雪や嚴寒に耐えながら緑を保ち、花を咲かせる三種の植物は、君子の不屈な精神、潔白な節操にたとえられる。文人、士大夫、禪僧らが自分の高潔な心情を「松竹梅」に投影し、数多くの文学や芸術作品を残した。

梅花、君自看、丁香已白、桃臉將紅、結歳寒三友、久運筠松。

南宋・葛立方（?～1164）「滿庭芳・和催梅」
歳寒三友要君知、不比凡花兒女姿。

南宋・姜特立（?～1192）「道堂以梅結屏」

松竹梅花三益友、詩書画卷一閒人。

——南宋・楊公遠（1228～？）「自述」

蒼松隱映竹交加。千樹玉梨花。好个歲寒三友、更堪紅白山茶。

——元・白朴（1226～？）「朝中措・題闕」

などの例が見られ、人々が松竹梅に対する愛好が窺えよう。

2 日本での発展——縁起物

霜雪の中でも色を変えないマツとタケ、春の魁に咲くウメ、この三者の組み合わせは、形からも色彩からも、最もよく調和されているといえよう。ゆえに、日本人に愛好され、絵画、紋様、染色、生け花などさまざまな領域で、松竹梅の姿が活躍している。この取り合わせは、中国の「歳寒三友」から影響されたことは明らかであるが、日本独自の文化特性も含まれていると思われる。

歳寒三友がいつ日本に伝わったかについては、明確な記録がないので、推測するのは難しいが、江戸時代の『世事百談』という本に、「松竹梅を、わが邦には慶賀のものとする。唐土にては歳寒三友といふ」とある⁶。また、江戸時代の民俗百科事典『嬉遊笑覧』という本の巻十二に

松竹梅、ことぶきいはふめでたき器物などに、松竹梅をもやうとす。漢土にはかかる事大かた奇数を用るこ

となければ、是は本邦の俗と見えたり。朝鮮の役に彼地より取来れる書として「日本考略」と云ものあり、明人薛俊が撰なるを朝鮮にても刊行せしなり。其内日本人の文詞略に、四友亭の詩あり、四友亭名萬古香清風會通到遐方我來不見亭中主松竹青梅自黃、此詩おのづから松竹梅をいへり。というのがみえる⁷。

つまり、豊臣秀吉の朝鮮征伐によって、朝鮮から中国明代の『日本考略』という本を持って帰った。学術、美術、工芸の最盛期である明の中期で、日本と明との交渉も盛んであったので、その文物も伝わり、松竹梅などという構図も広く伝わっていたものと思われる⁸。ゆえに、松竹梅の具体的な伝来時間は考証しにくい⁹が、少なくとも江戸時代以降民間に流行するようになったことは推測できよう。

最初は、中国の「歳寒三友」の影響で、松竹梅を貞節の象徴とたたえて詠む漢詩も少なくない。一例をあげると、室町時代の詩僧義堂周信の『空華集』に「梅を愛するに何ぞ必ずしも横枝を貫ばん、千尺雲を凌ぐも也天一奇、直節高標俗に背くと雖も、長松修竹、恰も相宜し」と、歳寒三友を詠む漢詩が見える⁹。

しかし、江戸時代になると、松竹梅がしだいに民間に入り、庶民の生活に滲みこんでいくにつれて、こういった文

学的なイメージはしだいに薄くなり、専ら民俗的な縁起物とみなされるようになった。お正月飾り・雛飾り、そして婚礼・出産等の慶事に用いられる主題として民間に定着し、「鶴亀」などと組み合わせ用いられることも多く見られる。

日本で「松竹梅」といえば「目出度い」ことの象徴と考えられるようになっていく。この「目出度い」の意味はいろいろな分野に反映されている。たとえば、地歌、箏曲や長唄の曲名としての「松竹梅」があり、いずれもめでたい祝儀曲である。また、「松竹梅」を題とする古典落語もあり、婚礼の祝福についての話である。現代社会に至っても、「松竹梅」というのは、日本酒の名前として知られ、贈り物にふさわしい祝い酒とされている。

このような縁起物としての松竹梅は、本来中国の「君子の美德」を有する「歳寒三友」のイメージから離れ、日本独自の民俗文化から発生したと思われる。どうしてこのような差異が生じたのか。松竹梅それぞれのイメージについて検討してみたい。

二 松竹梅のイメージ

1 マツ

マツは、崖や谷間などの悪い自然環境の中に生えても力強く育ち、冬枯れの中でもひとときわ青々とした緑を保つ常緑樹である。それに樹齢も長く、歳寒に耐えながら端正な姿を保ち続ける性状から、「百木の長」（『史記』亀策列伝）と呼ばれ、『詩経』、『礼記』、『書経』や『周易』などの先秦期の典籍にしばしば登場し、中国古典に類出する樹木である。

常緑樹の柏とともに松柏と併称され、君子の堅固な節操の象徴としてよく知られる。「歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るを知る」（『論語』子罕編）、「其の人に在るや、竹箭の筠有るがごとく、松柏の心有るがごとし。二つの者天下の大端に居る、故に四時を貫きて、柯を改め葉を易えず」（『礼記』礼器編）、「歳寒ならざれば、以て松柏を知るごとく。事難からざれば、以て君子を知ることなし」（『荀子』大略編）などの記述から見られるように、先秦時代からマツはすでに歳寒を凌ぎ、己を貫く君子の象徴として知られた。このイメージは後世に引き継がれ、文人たちに大いなる影響を及ぼしている。唐の李白が「願君学長松、慎勿作桃李。受屈不改心，然後知君子」（『贈韋侍御黃裳二首』其一、『全唐詩』卷一六八——一四）と歌って、マツの操を賞賛する。このような例は数え切れないほど見られる。また、マツは樹齢が長く、生命力も強いいため、「不老松」

とも呼ばれるように、長寿の象徴となつてゐる。長寿を願う吉祥画などで、よく鶴と組み合つて登場する。白居易の「効陶潜体詩十六首」其「一」に、「松柏与亀鶴、其寿皆千年」(『全唐詩』卷四二八—)とある。また、松脂、松の実が仙薬とされたところにより、マツは不老不死を象徴し、仙人、隠者、道士などとなつて登場する場合も多い。唐の賈島の「松下問童子、言師采藥去」(「尋隱者不遇」)(『全唐詩』卷五七四—一〇〇)がその一例である。

そのほか、マツの常緑の呪力をもつてゐるため、土地神の靈木にもみなされる。また墓に植えられ、墓標として使われる記述も見られる^⑩。

日本においても、マツほど多く文学の題材に採られる植物はないと言つてよからう。マツが最初に日本文学に現れるのは、『古事記』景行天皇の条に、ヤマトタケルが尾津の前の一つ松のもとで歌つた長歌である^⑪。日本最古の歌集『万葉集』の中で、マツの歌が六十七首ある。その中の多くはマツの長寿と繁栄をたたえたものである。

天平十六年(七四四年)の正月十一日に、恭仁京近くの「活道の岡に登り 一株の松の下に集ひて飲する歌」が二首伝わる。

一つ松幾代か経ぬる吹く風の声の清きは年深みかも

市原王(卷六・一四〇二)

たまきはる命は知らず松が枝を結ぶ心は長くとぞ思ふ

大伴家持(卷六・一四〇三)

万葉歌人は、ヤマトタケルのように、一本松のもとで飲み食いの宴をひらいた。「一本松を吹く風の音がさわやかなのは、この松が久しい年を経ているからであらうか」と市原王が詠嘆している。松を吹く風の音に常磐なるマツを思い、永遠の命を願つたのである。日本語に「松風」という言葉もあるように、マツの常磐なる命を連想させるのであろう。それに対して家持は、寿命がわからないもので、このマツの枝を結うのは命長かれと祈つてゐる、と詠んでいる。同じく常磐なるマツに長寿を祈つてゐるのである。このほかにも、『万葉集』に現れるマツは、たいていの場合、長寿の願望が歌いこめられてある。これは、漢詩文に長じた日本の文人たちが、中国的教養に影響された結果と言えよう。和歌だけではなく、マツにまつわる伝説にも、高砂の松、住吉の松、曾根の松など、長寿、吉祥とかかわる話は数え切れないほどある。

もう一方、民俗学のほうから見ると、マツは常緑樹ゆえに、神霊を迎えるよりしるとして崇められたのである。マ

ツの語源も、神の降臨を迎え「待つ」木とされる。そのため、現在にいたるまで「影向の松」というのが各地にあり、神仏がこの木の影に影向したものと信仰が見られる⁽¹³⁾。さらに、一年のはじまりの正月に、歳神を迎えるため門松を立てる習慣から見ても、神とマツとの深いかわりがあるが何れよう。

このように、日本のマツのイメージが漢詩文の影響を受けたため、中国と共通するものが多く見られる。たいていの場合、君子の節操、不屈な品格、あるいは長寿、繁栄への願望を込めて詠んでいる。ただし、和歌の中では、君子の品格よりも、長寿繁栄のイメージがもっと重視され、さらに固有の民俗と融合し、マツを神のよりしろとして崇める。これが日本の松竹梅のイメージを生み出す原点であることは、後でさらに詳述する。

2 タケ

タケもマツと同じく、四季を通して緑を保ち、快い葉ずれの音（竹韻）をかなでる植物である。とりわけ霜雪のなかでも変わらぬ緑を保って直立する性状から、不変・不屈な節操の象徴とみなされている。前に引用した『礼記』礼器の文句のほかにも、「彼の淇奥を瞻れば、緑竹猗猗たり。匪たるある君子、切するが如く、瑳するが如く、琢するが如く、

く磨するが如し」（『詩経』衛風・淇奥）など、タケの剛直、不屈な品格をたたえる名言が多く見られる。それに、タケは中空で節をもち、この性状はよく君子の謙虚、慎み深い美德にたとえる。愛竹家の白居易は「竹解心虚即我師」（池上竹下作）、『全唐詩』四四六一八三」とたたえている。

また、高雅で気品に富むタケは、俗塵を嫌う文人高士に愛好される。竹林の世俗の濁りに染まらぬイメージは、隠遁文学の主旨とよくあっているためか、タケを愛でる文人が数え切れないほどいる。有名な「竹林七賢」は、魏晋の王朝交替期に竹林に集まり、酒を飲みながら詩文を創作する放浪不羈の七人の文人のことである。晋の王徽之もタケを愛した風流人の一人であり、彼はどんなところに住んでも必ずタケを植え、「何ぞ一日も此の君無かるべけんや」という名言を残した。（『晋書』巻八十、『世説新語』任誕）北宋の文豪蘇軾も「食に肉無からしむべきも、居に竹無からしむべからず。肉無ければ人をして瘦せしめ、竹無ければ人をして俗ならしむ」（『於潜僧緑筠軒』）とユーモアに歌っている。

このほか、タケは実用性にも富み、建材から楽器まで幅広く使われている。また、その旺盛な生命力から子授けの力をもつとされ、マツと同じく繁栄の象徴として崇められている。「竹の苞れるが如く、松の茂れるが如し」（『詩経』

小雅・斯干）などの例がある。

日本の古典にタケも早くから登場した。『古事記』上巻、イザナミがヨモツニメを遣わしてイザナギを追ったとき、イザナギが「右のみみづらに刺せるゆつつまぐしを引きかきて投げすてれば、即ち笋（たかむな）生りき」とある。笋は竹の子である。投げた櫛が笋になったということから、櫛は竹製だったのであろう。斉藤正二氏の論考によれば、これは単なる装飾品ではなく、鬼神や邪霊を避け斥けるための呪具だったとされる⁽¹⁴⁾。

このような例は、『万葉集』にも見えている。『万葉集』の中で、タケが登場する歌は十七首見えるが、植物のタケそのものを詠んだ歌は少ない。比喩として使われたり、祭具、呪具として使われたり（「竹玉」、「竹珠」）あるいは「さす竹の」などの枕詞として使われたりする場合が一般的である。「さす竹の」という枕詞は、「皇子」「大宮人」、「君」などを修飾する。「さす」は生え延びるの意味で、タケの勢いよく成長する性状から繁栄を祈る意をこめて詠んでいるとみられる。タケの節と節の間の空洞に神霊が宿っていると信じられていたらしい。『竹取物語』など、タケから美女が出現する説話は、タケの神秘的な繁殖力に因んだと思われる。

このような民俗的なイメージをさておき、『万葉集』の中で単純にタケを詠む歌を見てみると、「梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林にうぐひす鳴くも」（小監阿氏奥島、巻五・八二四）、「わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも」（大伴家持、巻十九・四二九一）のように、かなり漢詩の風韻が漂っている。これらは中国文化に傾倒した律令文人、貴族たちの作歌だからこそ、中国の影が濃いわけである。日本の漢詩も、中国の風流を真似しようとして、竹を詠むと、竹林七賢などの典拠を踏まえる場合が多く見られ、竹と文人高士の風流さを結びつけるパターンをとっている。

要するに、タケは、日本列島の自生種もあるが、実は詩文などによく登場する品種は、中国から輸入されたものとされる⁽¹⁵⁾。しかるに、日本文学に早くも登場するタケのイメージは、中国から莫大の影響を受けている。タケが持つ強い生命力は繁栄の象徴とされ、祭具、呪具として使われている。また、竹林七賢をはじめ、多くの中国文人に愛されたタケは、日本においても高雅、風流、気品の代名詞として描かれている。ただし、マツとは違い、タケの「不屈な品格」や「君子の謙虚さ」などの美德は、日本文学に取り入れられなかったらしく、ほとんど用例が見つからないのは、

たいへん興味深い。

3 ウメ

中国では、ウメを植える歴史が長く、『詩経』や『尚書』などにすでにウメが登場している。しかし、それは調味料として扱われているウメの実であり、花を詠むものは見当たらなかった。南朝の梁代（502—557年）になって、人々ははじめてウメの花の美しさに注目するようになった。ウメは、ほかの花に先駆けて花をつけ、春の到来をつげる花として名高い。梁の簡文帝が「梅花賦」に「梅花特早偏能識春」というように、春花の代表として人々に親しまれ、めでたい花とされている。

また、ウメの清楚可憐な花びらは、純潔な少女を連想させる。南朝の宋武帝の娘寿陽公主が人日に含章殿の梅の木の下で眠っていたら、梅花が散りその一ひらが彼女の額について離れなくなつた、これを「梅花粧」として宮人皆額に梅の花びらをかたどつた化粧をほどこし、これになつたという。この「梅花粧」の話は後世の詩文に頻出する典故となつている。さらに、梅の花が早く開き、早く散るところから、前述の「梅花賦」の「春風吹梅畏落尽、賤妾為此斂蛾眉」の句のように、青春が過ぎ去る象徴として、閨怨詩などの題材ともなつている。

だが春に散る梅の花は、同時に冬の厳寒に咲く花としても捉えられる。唐代中期から、詩人は梅の寒さを凌いで咲く特性にも注目するようになった。北宋初期の隱逸詩人林和靖の名句「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」（「山園小梅」）がウメを俗塵を脱した高雅、風流な隱者にたとえ、ウメの流行を決定付けた。ウメの厳寒に耐え、疎らな瘦せた枝先に馥郁たる花をつける特性はさらに重視され、「遙知不是雪、為有暗香來」（北宋・王安石「梅花」）「零落成泥碾作塵、只有香如故」（南宋・陸遊「卜算子・詠梅」）など数多くの名句が残された。その高い気品と幽閑な風趣が、文人墨客の好尚になつたゆえ、ウメは中国古典の中で大変重要な植物の一つになつている。

マツとタケとは異なり、ウメは日本における自生種がなく、奈良時代に中国から渡来した植物である。ゆえに、日本の梅のイメージには、中国文化の色彩が濃いのは言うまでもなからう。

日本文学で、ウメの初出は漢詩集『懷風藻』に収録された葛野王の「五言・春日翫鶯梅一首」と題する詩である。のどかな春の園に美しい白梅が咲き、ウグイスがこころよく鳴くシーンを詠んでいる。『万葉集』の、前期の歌にウメが見られなく、天平期（七二九）に入ってから急激に

詠み上げられるようになったのである。『万葉集』の中では、ウメを詠む歌が一八首もあり、萩について多い。中国文化に心酔した日本の歌人たちは「梅花の宴」を開き、酒を飲みながら梅花を賞し、多くの和歌を残している。例をあげてみると、

梅花の宴の最初の歌で、大弐の紀卿の作である。

正月立ち春の来らばかくしこそ梅を招きつつ楽しき終えぬ
（巻五・八一五）

正月になって、春が来たなら、こうやって毎年梅を迎えて歓を尽くそうと挨拶している。

また、後に追和する歌に、

梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ酒に浮かべこそ
（巻五・八五二）

梅の花が夢に現れて、みやびたる花だと自分では思っており、さかずに浮かべてください、と語りかけたという。

このように、梅花に対する愛好は、中国文化への憧れから来ていると言えよう。ウメは春をつけるめでたい花であり、また華やかな大陸文化を代表する風雅な植物でもある。日本人に古来親しまれ、宮中に植えられていた。天皇が貴族たちと梅の下で宴を開き、数多くの文学作品を残した。『源氏物語』に人々が梅を愛でるシーンがよく描かれ、『枕

草子』にも「あてなるもの梅の花に雪のふりたる」とある。⁽¹⁶⁾ 時代が下がって、日本人がしだいに大陸文化への憧れから離れたとしても、ウメは春をつけるかわいらしくてみやびな花として、今日まで日本人に愛されている。

ウメは中国から渡来した植物でありながら、日本人に親しまれてきた。ゆえに、ウメの春を告げるイメージや文人が愛でる風流はもちろん、「雪月花」や「梅に鶯」などの取り合わせも中国の影響を受けている。ウメが日本文学におけるイメージは、日本独自の要素が少なく、中国の文学伝統を継承していると言えよう。しかし、その文学伝統は、唐代までのものであり、宋以降ウメが持つ「君子の節操」などのイメージは、日本の五山文学などの漢詩分野に影響を及ぼしたが、日本独自の文学、文化への影響は小さい。ゆえに、日本文学におけるウメのイメージは、外見が美しくて人々に親しまれているが、内部の「美德」に注目する人は、ほとんどいない。この点の中日の大いなる分岐点であり、「歳寒三友」の取り合わせの成立に関する大変重要な問題でもある。

以上論じてきたように、松竹梅三者ともに、繁栄や長寿、子授けなど縁起のいい意味をもっていると同時に、歳寒を

凌ぐ性質から、不屈、強靱、高潔などの美徳があるとされている。

このようなイメージは日中共通であるが、文学の発展につれて、中国は後者の「美徳」の面を大事にするようになったが、日本は前者の「縁起」の面をもっと重視している。これは今の日中の松竹梅のイメージに決定的な影響を与えたのであると考えられる。

三 日中「松竹梅」の違いと原因

前述したように、「松竹梅」の取り合わせは、中国で起り、日本に伝わったものであるが、今に至っては、日本のイメージは異なっている。

中国の「歳寒三友」は、絵画に始まったとはいえ、題画詩をはじめ多くの文学様式に取り入れられ、文学に活躍している植物の群像と見える。その霜雪に耐えながら節操を保つ性質は、よく君子の美徳にたとえる。

一方、日本では、マツとタケは自生種があるが、ウメは奈良時代に、中国から渡来したものとされる。それゆえ、日本の松竹梅のイメージに、中国文化の影響は否定できない。おそらく、松竹梅を画題や彫刻の文様などにするのは大陸文化の影響であろう。しかし、お正月に松竹梅を飾り、

めでたい縁起物として取り扱うのは、日本独自の風習である。

つまり、中国の「松竹梅」は文学上のイメージであり、文学や芸術の面によく取り上げられ、「君子の徳」を備えるものとされる。それに対して、日本の「松竹梅」は民俗的なもので、人々の日常生活によく滲みこんで、めでたいものの代表として、祝い事にしばしば使われている。

どうしてこのような差異が生じたのか。桜井満氏が、それは中国の「歳寒三友」ではウメが欠かせない植物であるに對して、日本のほうは、マツが中心となっているからだと主張している⁽¹⁷⁾。

この問題についてさらに詳しく私見を述べたい。

1 松竹梅と門松

日本では、お正月の飾りに、松竹梅を飾る習慣がある。マツの操、タケの直とウメの香というめでたい意をとっているからである。しかし、はじめから松竹梅を飾ったわけでもなく、最初は新年の瑞祥になぞらえて、専らマツだけを立てていたようであり、それを「門松」と呼ばれている。

門松の起源については、一説にはこれが中国から伝わった行事という。『史記』亀策列伝に「松柏を百木之長となし、門閭を守らしむ」とあることから、中国から伝わった風習

という説がある。もう一説には、これが日本独自の風習である。日本は古来神事が多く、昔は神や小竹葉を捧げ門に立てる習慣があったのが、やがてマツに変わったと、門松古来説を唱える人もいる。

いずれにせよ、正月に門松を立てるのは日本で長い歴史をもつ行事である。日本には昔から門神を祭り、一年中の邪気やけがれを払う信仰がある。常緑樹のマツは、神のよりしろとして、歳神さまの降臨を迎えるものとして崇められていたらしい。

平安後期の『本朝無題詩』に、惟宗孝言の「長斎之門以詩代書、呈工才子」という詩に、「鎖門賢木換貞松」の句があり、その自注に「近來世俗、皆松を以て門戸に挿ず、而して余は賢木を以て之に換う、故に云う」と出ているのが門に松を立てることについての日本の最古の文献である。さらに、「門松」という言葉の初出は『堀河院百首』の「門松をいとなみたつるその程に春あけがたに夜やなりぬらん」（修理大夫顕季）とあるゆえ、その頃は確実にこの習慣がひろまっていたことが推測できよう¹⁸。また、平安末期の『梁塵秘抄』に今様の歌が、「新年春來れば 門に松こそ立てりけれ 松は祝ひのものなれば 君が命ぞ長からん」と歌われているのもその点を裏づけている。

後に、門松にタケを添えるようになった。鴨長明が『四

季物語』に、松竹をたてたのは「欽明の御代より」始まったと書いているが、実際にタケが組み合わされるようになったのは室町時代と思われ、さらにウメを添えるようになったのは徳川時代からと言われる¹⁹。松は長寿、家運の繁栄、竹は子孫繁栄、梅は君子の徳をあらわし、こういった民俗的な風習によって、松竹梅は日本人の心によく溶け込んで、日本人の生活にもよく生かされている。

また、三つの植物の取り合わせを吉祥とするのは、前述した『嬉遊笑覧』に述べられるように、奇数を吉祥とする「日本の俗」から来ているとも考えられる。中国の民俗思想では、三、五、七といった奇数の数字は、あまり喜ばれていない。たとえば三月の節句、五月の節句などというの、三月とか五月とかは悪月で、その月にすべての災厄が最も集中的に訪れる月であるから、それを防衛するために、集中的に、祓禊がなされねばならぬ月である。人日に春の七草を食べると疫病を防ぐというのもその意味である²⁰。ところが、日本では逆に、七五三の陽数を「めでたいもの」と考えているのである。

おそらく、松竹梅の模様が日本に伝来してから、日本の本来の「門松」の風習と習合し、松竹梅をお正月の飾りにしたのである。ゆえに、日本の松竹梅の中心は「マツ」と思われる。本来門松がもつ神を迎え、邪気を払う力は、

やがて「松竹梅」の全体にわたり、松竹梅が日本でめでたいものとして飾られるようになったのであろう。

2 ウメと歳寒三友

中国では、歳寒三友に類似する植物の取り合わせがある。

梅蘭竹菊を「四君子」

松竹梅蘭を「歳寒四友」

松竹梅菊石を「五清」

とそれぞれ名づけた。そこで、歳寒の植物としてウメは欠かせないものであるのがわかる。それは松竹梅の中でウメが中心であると主張したいわけではないが、松竹梅の取り合わせが成り立つには、ウメのイメージが決定的な役割を果たしていると考えられる。

松竹梅三種の植物が最初から一つのグループになっていったわけでなく、後になって組み合わせられたのである。三種の中で、マツとタケは古くからつながっている。前述の「竹箭の筠有るが如く、松柏の心有るがごとし」（『礼記』礼器編）をはじめ、松竹で人の剛直、不屈な品格をたたえる例が多く見られる。例えば、晋の戴逵の「松竹賛」に「猗欤松竹、独蔚山皋。肅肅修竿、森森長条」などが見られる。

しかし、梅は最初にほかの二種とは性質が異なっていた。梅は、はじめは嚴寒を凌ぐ花ではなく、桃花や李花と同じ

く、散つてゆく春花とされていた。それゆえ、梅は常に詩人に弱くて移ろいやすいイメージを与える。楽府に「梅花落」という題があり、梅の散りゆくさまがしばしば描かれる。南朝の詩人吳均の「梅花詩」に「梅性本輕蕩、世人相陵賤」という句があり、梅の弱くて頼りないイメージへの極端的な批判である。このイメージは北宋まで続いた。北宋詩人曾鞏「菊花」の「菊花秋開只一種、意遠不随桃与梅」（『全宋詩』卷四五六）のように、春にはやく散つてゆく梅と桃花との対比によって、秋の寒さに耐えて咲く菊を褒めている。

だが唐代中期から、詩人は梅の寒さを凌いで咲き、最初に春の到来をつける特性にも注目するようになった。宋代になると、理学の発展にも注目するようになった。宋代の外見から内部へと変化し、ウメの精神はさらに重視されるようになった。外敵に侵略され、戦火と動乱を遍歴した宋の詩人たちにとっては、民族精神、敵に屈服しない気概は何より大事である。その精神を代表するウメは宋代で高く評価され、『全宋詞』でいちばん詠まれる花となった。南宋の範成大が『範村梅譜』に、「梅、天下尤物、無智賢愚不肖、莫敢有異議。学圃之士必先種梅、且不厭多。他花有無、多少、皆不係重輕」という評価は、当時の人がウメに対する愛好をよく反映した。つまり、年齢、身分を問わず、

誰もがウメを愛し、植えている。ウメさえあれば、ほかの花はどうでもいいことになっていると、宋代の「ウメブーム」の状況が窺えよう。

このようなブームがあつたこそ、梅のイメージはしだいに同じく厳寒を凌ぐ松、竹とつながるようになり、「松篁傲雪堪為伴、桃李酣春未敢先」（葛勝仲「菁山梅花盛開、予独未之知、十一月二十二日周元挙察院餉數枝、以詩謝之」、『全宋詩』卷二十四）、「寧知姑射冰肌侶、也学松筠耐歲寒」（李觀「雪中見梅花」、『全宋詩』卷七）など数多くの詩句に詠まれるようになった。

漢詩における代表的な植物は、大体なんらかの「美德」の持ち主とされる。自然物が美しく思われるのは、人の美德を反映するからであるという、いわゆる「比徳」の文学伝統がある。梅のイメージの変化を見ると、中国で「徳」がどれだけ植物のイメージを影響しているかは言うまでもなからう。春に散る梅の花は、同時に冬に咲く花でもあるので、霜や雪を恐れず、強くまっすぐな気概の持ち主とされるようになった。

このようなイメージの変化は、絵画にも反映している。史料によると、梅花図がはじめて登場するのは、南北朝時期であり、マツやタケに比べればかなり遅れている。唐代以来、梅を描く画家はやや増えた。宋になると、ウメを観

賞する風潮にもなつて、ウメを描くのも文人、画家の間でブームとなつた。北宋の華光僧仁が初めて墨梅図を試み、南宋の揚補之がその様式を確立した²³。それを文人たちに吸収され、だんだんとマツ、タケなどと組み合わせせて絵に描かれ、今日の「歳寒三友」の取り合わせをなしたのである。

ゆえに、松竹梅の取り合わせの成立に、ウメは重要な役割を果たしている。儒家の植物比徳の思想の影響で、ウメは単なるかわいらしい春花から、君子の徳を有する植物になつた。そのイメージが定着してはじめてウメが松竹と平等な地位になり、松竹梅の組み合わせが生じたと思われる。

以上のように、日中の松竹梅の起源と発展、それぞれの意味あいについて論じてきた。同じ植物の取り合わせも、両国で違う発展のルートを歩んできた。日本の松竹梅は門松などの古来の風習と融合し、民俗的、日常的な縁起物となつているが、中国の歳寒三友は、儒教の「比徳」思想の影響で、繁栄や長寿を祈る意がしだいに薄くなり、専ら君子の高尚な美德を象徴するものとなっている。また、日本の松竹梅の中で、「マツ」が主役であるのに対して、中国の松竹梅には、「ウメ」が欠かせない植物である。

このような松竹梅のイメージの差異から、日中文化の違

いが見られる。日本に比べたら、中国はもつと道徳的、精神的な面を大事にしている。文学はかならずなんらかの意志を表し、つまり「詩言志」の文学伝統は花草にも投影していると言えよう。

注

- (1) 程傑「歳寒三友」縁起考、「中国典籍与文化」二〇〇〇・三
- (2) 諸橋轍次ら編『大漢和辞典』、大修館書店、昭和六十年(1985)による。
- (3) 高雲龍「浅析『松竹梅』的象徵意象」、「芸術教育」二〇〇七・五
- (4) 前掲論文
- (5) 加藤周一ら編『世界大百科事典』、平凡社、一九九八年
- (6) 『日本随筆大成』第一期第九卷、山田美成著『世事百談』
- (7) 『日本随筆大成』第二期別巻下・四、喜多村信節著『嬉遊笑覧』「草木」「松竹梅」条
- (8) 松田修「松竹梅の文化史」、大森志郎ら『松竹梅——日本人の美と心』、一一〇ページ、社会思想社、昭和四十七年(1972)。
- (9) 山岸徳平校注、新日本古典文学大系『五山文学集』、岩波書店、一九七三年
- (10) マツのイメージは、月刊「しにか」特集「中国のイメージ・シンボル小事典」(植木久行ほか項目執筆、大修館書店、

九六年五月号)、『中国シンボル・イメージ図典』(王敏、梅本重一編、東京堂出版、二〇〇三年)を参考して整理したものであり、以下の「タケ」「ウメ」も同じである。

(11) 歌の原文は「尾張に直に向かへる尾津の崎なる一つ松あせを一つ松人にありせば大刀佩けましを一つ松あせを衣服せましをあせを」であり、『古事記』景行天皇条より。なお、本論に引用する『古事記』の原文は、山口佳紀、神野志隆光校注・訳、新編日本古典文学全集『古事記』(小学館)による。

- (12) 本論に引用する『万葉集』の本文は、小島憲之ほか校注・訳、新編日本古典文学全集『万葉集』(小学館)による。
- (13) 齊藤正二「植物と日本文化」十一ページ、八坂書房、二〇〇二年
- (14) 前掲書七十二ページ。
- (15) 沢村幸夫「中国草木虫魚記」江南竹、南京冬筍条
- (16) 松尾聡、永井和子校注・訳、新編古典文学全集『枕草子』、小学館、一九九七年、第三十九段「あてなるもの」
- (17) 桜井満「松竹梅の由来」、「高校通信東書国語」二九九号、平成二年
- (18) 荒井源司「梁塵秘抄評釈」、甲陽書房、一九五九年。「今様」春十二番歌の解釈
- (19) 高嶋雄三郎、ものと人間の文化史16『松』、法政大学出版局、一九八五年初版第二刷、四十五ページ
- (20) 松田修「松竹梅の文化史」、大森志郎ら『松竹梅——日本人の美と心』、社会思想社、昭和四十七年(1972)。
- (21) 逢欽立編『先秦漢魏晋南北朝詩』、中華書局、一九八三年、

一七五—頁

(22) 俞香順『中国荷花審美文化研究』、巴蜀書社、二〇〇五年、
八—一〇頁

(23) 陶金鴻「梅的象徴与写梅的歴史」、『新美術』二〇〇九・二

(HAN·Wen、本学大学院文学研究科人文学専攻博士後期課程)